

ペンを持って自分を探す旅に

三木中学校 一年 王鞍 紗千

私は文章を書くのが好きだ。特に物語。登場人物に空を飛ばせたり、魔法を使わせたりすることだって出来る。物語は本当でないことをあるのではないかのように想像して書く。でも、作文を書くのは好きではない。ルールがしっかり決められているから。「これからは家でもやってみようと思います」「楽しかったです」「このような文章をもう何度書いたのか。クラスの人も同じようなことを書いている。そこに自分も合わせないといけないと思う。もし、合わせていないと、みんなに変に思われるかもしれない。うそを書いているつもりはないけれど、みんなが使いそうな正解の言葉を選んで。でも、全員が同じだから悪いことだとは思わない。

「その作文、嘘が混ざっていない？」というセリフが目に入った。スムーズに読めていた目が止まった。ドキリとした。本当に家でやってみようと思っていたのだろうか。こう書けばいいと思ってしまうのではないか。その時この本の主人公とつながれた気がした。

主人公のタコジローは中学三年生で、タコの自分が大嫌いだ。顔が赤くなると笑われるからだ。そしてタコジローも作文

を書くのが嫌いだった。書いても面白くないし、作文を書く意味は先生に「いい子」だと思ってもらうため。このときタコジローに共感した。自分と似ている考えをしている人がいたんだと、少しうれしかった。私もみんなと違うことを書くよりも、同じことを書いた方が楽だし、安全だと思っている。

「言葉を決めるのが早すぎる」ということにも注目してみた。これはタコジローにたくさんのアドバイスをくれるヤドカリおじさんが教えてくれた。私は今まで「考える」というのはとりあえず、みんなが書きそうなことでマスをうめることだと思った。でも「考える」とは答えを出すことだ。じゃあ、私の作文は「考えた」ことになるのだろうか。

例えば、お菓子を買いに来たとする。Aのお菓子はいつも食べていて、自分が大好きなお菓子。BとCは見覚えはあるけど食べたことがないお菓子。私ならAを選ぶ。知らないところに冒險する勇気がないので、Aを選ぶだろう。ちゃんと考えたつもりだ。でも、実はAを選ぶのは安定していて失敗しないからだ。ここでも「考える」ことはできていなかったのではないか。作文も同じだ。

「いざ感想文を書くこうすると『感動しました』『楽しかったです』とかのよくある言葉を選ぶ。」

それはいつものお菓子を選ぶのとよく似ている。本当にその通りだと思った。私は、一步冒険すると、周りに変と思われるかもしれないから、なにも考えずに△を選んでしまっていた。「考える」ことができていなかったのだ。

それに私は△との関わり方にもつながる気がした。△は使うとすぐに答えが出るのですごく便利だ。私も使うことがあつた。六年生の家庭科で料理のレシピを調べることがあつた。値段に制限があり決めるのが難しかった。そのとき、クラスの友達が先生に聞いた。「先生、チャットGPT使つていいですか？」先生は否定しなかった。だが、だんだん全員が使うようになった。すると、学校のタブレットではチャットGPTが使えないようになった。みんなは「なんで使えないようになった？」と言つていて、私も「こんな便利な物なのに、とがっかりした。でも、この本を読んだ今なら私は、学校が禁止した理由もわかる気がする。それは、調べ学習に△を使うと自分で考える力がなくなるからだと思う。ではその場合どうすればいいのか考えた。質問だけを書く」と「考える」ことにはなつていないけれど、質問に自分の考えを書くことにすると。例えば「なぜ？」私の予想は「だと思ひます。」それが本当に合つてゐる答えかはわからないけれど、「考える」という目標は達成できているのだと思う。

私はいろいろなことを簡単に考えないで、何度も考え直すこ

とで自分の考えとしていいのだと思う。

私は、最初はみんなが正解だと思つてゐるものが自分の正解だと思つてゐて、作文や感想文でも、毎回同じような文を書くようになってゐた。でも、この本で文を書いたり、考えるコツを覚えてもらう事ができた。相手に合わせて嫌われないようにと必死だつたけれど本当の自分の考えを考えられてゐなかつたから、これからは自分の考えをしっかりと探すために自分の書き方で書いてみようと思う。人の気持ちばかり考へてゐた自分が自分の気持ちに向き合ひ変わると思つた。そして私は自分を探す旅にもう一度出ようとしてゐる。